
死者の忘れ形見

雑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死者の忘れ形見

【コード】

N32190

【作者名】

雑

【あらすじ】

母の温もりを知らないマーニは、母の墓参りに来ていた。

そこで出逢ったのは…！？

く母or悪魔？（前書き）

雨月御蔭様の「Go Appeal!」の2次創作です。まずは本家をお読みになってください。またベースが同じなだけで、私のオリジナルキャラが主人公だったりするので、ご理解いただける方だけ読んで下さい。

「母 or 悪魔？」

父との唯一の思い出が残る地…それが母の眠るこの場所であった…。

「母さん…久しぶり。」言いながら、マーニは、無機質な石に微笑みかける。無駄なこととはわかっているが、癖なので仕方ない。

いつもは寡黙な父が母の墓参りに来る時だけは、たくさん話してくれた。母が生前どんな姿をしていて、どういう性格だったか、好きだった花等…ほとんど話題は、母の話だったが、マーニにとっては充分嬉しかった。父の表情がその間だけ和らいでいるように思えたからだ。母のことは自分では思い出せないが、父のおかげで知ることができた。

「ほら、母さんの好きなエーデルワイス。」墓の前に花束を置く。白くて可憐な花は正にトニアにピッタリだと父は言った。プロポーズの時には献身的な愛の証として贈ったと照れながら父は話していた。

「…母さん…。」少し躊躇した後母の名前の刻まれた石に触れる。当然だが、温もりはない。

（もう母を恋しがるような歳ではない…。）ずっとそう自分に言い聞かせてきた。そうやって自分を保とうとした。…けれど、それはなんと脆い虚栄心なのだろう。頬を一筋の涙がつたい、母の墓へ落ちて染み込んでいった。すると、

『泣くなっ！』と背後から一喝された。反射的に振り向く。そこには、父の話で聞いた母・トニアが生前の姿のまま立っていた。

「…っか、母さん!?」驚きで、声が裏返る。

『なんだ、お前。それに誰だ？母さんって。』めんどくさそうに早

口で言うトニアらしき人物。

(え…？他人の空似？でも銀の長髪に、すらつとした脚、それから人形みたいに整った顔立ち…間違いないと思うんだけど…) まじまじと改めて見返し、昔父に見せてもらった写真の母の容姿を思い出す。

『だつから！一体何なんだっ！オレはアルという夢魔で、コレは借り物の人間の身体…まあ死体だがな。全くニイロといい、訳のわからないことばかりほざきやがって！』 苛立ちを隠せないのか髪を掻き乱すアル。どうやら短気の様だ。

(違うといえば性格くらいか…？) そう結論を出した時、ニイロという名前が耳にとまる。

「父を…ニイロを知ってるのか!？」アルの両手首を掴む。これ以上、美しい母の姿で粗悪な態度をとってほしくない。

『な、何だよ？知ってたら悪いか？』アルが、マーニの迫力に少したじろぎながら言う。

「父のことやお前との関係を教えてくれ！何でもいい！それと、その身体は母のもので、お前みたいな悪魔が入っていい身体じゃないんだ！今すぐ出る！」捲し立てるマーニ。

『それがヒトにも頼む態度かよ。ま、いいけど…でもいいのかなあ…？この身体死体だからオレみたいな悪魔が入ってないと腐るんだぜ。お前の恋しいママは、みるみるうちにミイラになって見るも無惨なお姿に…ってね』口を歪ませ、からかい口調で話すアル。母の姿じゃなければ、ポコポコにしてやるところだ。

「ま、待て！じゃあとりあえず姿に関しては我慢するから！そのままでいろ…じゃない、いてくだ…さい。」アルの脅しに負け、強く出られない。

『よし！じゃあまずは、飯だ！なんか食わせる！』強引にグイッとマーニの手を引くアル。

(温かい…) (半ば引きずられるように歩きながら、そんなことを考えた。)

「そついえば…悪魔って何食うの…？血…とか？」なるべく他の人に聞こえないよう、小声で尋ねる。

「悪魔は雑食だから、なんでも食べるさ。それこそ人間の血肉でもな。まあ人間界は旨い食い物が山ほどあるから、まず人間に手を出すよつなことはしないけど…な。」と回りを気にせず大声で言いながら、下品な笑みを浮かべる。まるで、もしもの時は、俺を食料にするという意味を含んでいる様で…背筋が凍りついた。

街の賑わいの様子が珍しいのかアルはキョロキョロとしている。

(おのぼりさんかよ…) 無言のままドーナツ屋にふたりで入る。手当たり次第のドーナツを買い、アルに渡す。

『…っんー…やっぱ、むぐ…人間界っ…んぐ…さいっこー…！』ドーナツを2、3個ずつ頬張りながら、アルが幸せそうな笑みを浮かべる。その笑顔に見とれ、

(これが母さんなら、どんなにいいか…) と考える。母が生き返った様な気がして嬉しい半面、『コレ』は母とは違うのだと必死に気持ちにブレーキをかける自分がいる。

『なんだ…？食わないなら、オレが全部食うぞ？』最初から人にくれる気などないくせに、一応気遣うような言い方をするアル。

「いらねえよ。そんなことより、食べたら服屋行くから速くしろ。」考えていたことを悟られないように、アルを急かす。

『服…？服なら着てるじゃんか、コレ。』アルがキャミの裾を持ってヒラヒラさせて見せる。翻ひるがえってオヘソがちらつと見えた。

「…っ…。」不覚にもドキドキしてしまう。視線を反らして違うことを考えようとするが、泳いでしまう。

「ん…？なんかさつきから変な目線感じるなあとは思ってたけど…いくら若いからってママの身体見て息子が赤面しちゃダメじゃなあ

い？」わざとらしくアルが顔を近づけてきた。

「なっ…違う…！これは暑くて赤くなっただけであって…、だな。そんなことはっ…ない、決して！」凶星だった。今時キヤミー枚を外を歩いていても変ではない。しかし、このままだと目のやり場に困るのだ。それに、母の身体をあまり露出されたくない。

「もう食わないなら、行くぞっ！俺は早く帰りたい！」今度はマーニがアルの手を引いた。

『なんだっけ、こういうの。…マザーなんとか…んー…マザーコンプレックス？マーニの場合度が行き過ぎだけど！』アルがきゅっきゅと楽しげに笑う。

「うっさい！！！」大声を張り上げた。

過去と現在を繋ぐもの(前書き)

説明文が長いです…。

過去と現在を繋ぐもの

カナビイル孤児院。外界から隔離される様に存在するそれは、政府がストリートチルドレンに読み書きを覚えさせ、自立させる名目で作ったもの。だが、本当の目的は、街を見た目だけでも良くしようというものだった。言わばゴミ溜めと変わらない。

鉄格子の嵌められた窓に鍵と鎖がついた重い扉、分厚い壁……。食事や運動以外には部屋を出ることも許されず、唯一他の子供と一緒に食事や運動中も私語は禁止という厳しい規則があった。…そこは孤児院とは、名ばかりの監獄。マーニはそこに幼い頃預けられていた。

『…ニ…マーニってば！』

呼ばれて飛び起きると、アルがバスタオル1枚の姿で立っていた。

「…っ！？…う、わあ！？…イテッ！」驚いた拍子にベットから落ち頭を打つ。

『ダツサ〜。何やってんの？』冷やか目をするアル。

「そんな格好すんなよ！」頭を撫でながら、どうせ聞かないが、一応注意する。

『じゃあ買ってきた服よこせよ。それより気持ち良かったぜー風呂！マーニも一緒に入ればよかったのに。』アルが悪びれた様子もなく、とんでもないことを言う。

「誰がお前なんかと！！」目線をそらして話をする。見た目は母でも中身は悪魔だ。もし本当の母なら一緒に入るというわけではないが。

『でもニイロは一緒に入ったぞ？』服を受け取り、満足そうな顔で言うアル。

「は？」思考が一瞬停止する。

『いや、だから。ニイロとオレは風呂一緒に入ったりしたって話！少しの間一緒に暮らしてたし。』アルは、マーニが聞こえなかった

と解釈した様で、もう1度はつきりと言っ。

（何やってんだ…父さん！？）怒りとも呆れともとれる感情が芽生えた。

『そっだ、コレ！』アルが本の様なものを差し出す。

「本…？」手に取って中を開く。

『それは、トニアの日記だ。』静かにアルが告げた。

過去と現在を繋ぐもの（後書き）

早く続き書きたいです！番外編もやっちやいたいです！

〈日記と真実〉

「私たちのたからものマーニへ

生まれくれてありがとう。あなたを孤独にさせてしまった私たちには親と名乗る資格はないのかもしれないかも。でも確かに愛してただけは覚えていて

でも確かに愛してたことだけは覚えていて人の道を外れたニイロを恨まないであげて

決して赦されることではないけど、私たちにはお互いしかいなかったのだから……」

日記には延々とニイロとマーニを気遣う言葉が書かれていた。

「か……あ……さん。」やるせない気持ちが入み上げ、日記を抱きしめる。

「トニアはふたたりを置いて逝くことを、とても悲しんで苦しんでいたんだ。特にお前はトニアが死ぬときもう少しで生まれそうだった。たったから余計心配だったんだろ。」淡々とアルが言う。

「お前：母さんに会ったことがあるのか……？」初めてアルとマーニが会った時アルはトニアを知らない素振りをしていたはずだ。

「まあくわしく言うと、身体に残った思念ってやつだな。実際会ったわけじゃない。ニイロもトニアにどんな形でも生き返ってほしかったようだ。禁術に手を染めてまでな。」アルにとっては人間の身体に入れたのだから嬉しいはずなのだか、あまりそうは見えないのは気のせいだろうか。

「……。じゃあ俺は母さんが死んでから生まれたのか……？」アルの言葉通りならそうなるはずだが、果たして真実か疑問だ。

「それは……。目を少し伏せ、言葉を濁すアル。」

ガタツ ガタンツ

急に玄関の方で物音がした。

「…チツ。大事な話をしてる時にっ！」マーニが玄関に向かうとちよつど倒れ込む様にニイロが入ってきた。

「父さん!？」信じられなかった。

「ニイロ!」安堵と心配の混じつた声のアル。

「マーニ、ますますトニアにそっくりになつたなあ。」「ニイロがマ―ニとトニア(アル)を見比べてしみじみ言う。

「いきなり帰ってきて、言うことそれだけかよ!俺がどれだけ…っ。
「文句をいってやろうと思つたのに、父の真剣な顔に何も言えなくなつた。

「もちろん、それだけじゃない。

あまりアルを責めないでやってくれ。勝手なことを言ってることは承知の上だが、悪いのは…全然俺だ。」「そついうと、ニイロはマ―ニの前で頭を下げた。

「んなつ!謝つて済む問題だと思つてんのか!」「ニイロの胸ぐらを掴む。

その様子をハラハラしながらアルが見ている。

「もちろん思つてない。だが、これだけ聞いてくれ。お前はアルのお陰で生まれられたんだ。アルが…トニアの身体でお前を生んでくれたんだ。」「真つ直ぐマ―ニを見るニイロ。

「ア…ル…が?嘘だろ…?」「我知らず呟いた。否定して欲しくてアルの方を振り向く。

「……。黙つてて悪かつた。でも…ニイロがあんまりにも見てられない状態で…さ。オレはいくらトニアの姿をしていても、『トニア』にはなれない。だから、トニアとニイロが確かに愛し合つた証を残したかつたんだよ。」「アルがうつつ向いたまま言う。

「はっ…ハハツ。なんだよ、それ…。俺ひとりでバカみたいじゃないか。」「自嘲と涙が零れた。

↳過去編：not equal↳（前書き）

過去編です。舞台はカナビル孤児院ということで…一応。

〈過去編：not equal〉

見る、根暗のニイロのお通りだぞ！」嘲る声がする。

「……………」

煩いと思いつつも無視だ。そのまま立ち去ろうとすると、

「待てよ！コレ染めてんのか？生意気だぞ。」髪の毛を引っ張られるが、

「……………」そいつの手を払い、歩を進める。

「トニアもこんな奴のどこがいいんだか。」馬鹿にした様に、もうひとりが笑う。

（『こんな奴』に構ってるお前らもお前らだよ）小さく溜め息をつく。

「なつ。全く変なしゅ…ガハツ…」

思いつきりそいつの頬を殴り、

「俺のことはなんとも言え。でもトニアを馬鹿にするんなら、次は殴るくらいじゃ済まさねえからな。」一瞥をくれてやる。ガラの悪い3人組だ。俺も他人のこと言えないが。

「な、コイツなめ…っ…！」

殴りかかってこようとした奴の上に分厚い辞書が落ちてきた。

「あーごめん、ごめん。手が滑っちゃった！…そうそうさっき院長先生見回りしてたけど大丈夫？」階段の上の踊り場からトニアが顔を出した。

「いてえ…くそつ。ババア来んのか、逃げる！」

「覚えてろ…！」

「調子のんじゃないやねえぞ！」口々に悪役の常套句を言い、バタバタと逃げ出す3人。

「トニア…わざとだろ。あと院長が来るってのも嘘だな。」疑いの

眼差しをトニアに向ける。

「まあ何でもいいじゃない！それよりニイロやるね！」ニコツと彼女が笑う。

「別に…。てか、お前も相変わらずだよな。」自然に笑みが溢れる。

「なあに？それはほめられてるの？」「きよとんとするトニア。

「フツ…変わってるってことだよ！」「溜まらず吹き出して笑った。

この時はまだ『好きだ』なんて思いもしなかった。いつからだろう。彼女が必要不可欠な存在になったのは…。

↳過去編：not equal↳（後書き）

うーん…トニアが憤ましくなりません。何故だ（笑）

く過去編：changesく(前書き)

今回は少し短いですが、キリがいいので) - " - (:)

く過去編：changesく

「ほら、ここ鍵が壊れてるでしょ？私が見つけたの！」自慢気にトニアが言う。そこはカナビル孤児院の裏口の扉だった。

「へー。…で？」

確かにこの要塞の様な孤児院の鍵が壊れて、しかもそのままになっているのは珍しい。

「決まってるじゃない！抜け出すのよ。」当然だと言わんばかりのトニアにちよつと驚く。

「そつか…って俺も？」外界そとへの憧れはあつたが、恐れもあつた。だったら少し虚しいが大まか満足している今の生活を続けた方がましに思えたのだ。

「現状を変えたくない？」真顔で問いかけてくるトニア。

「変えたいけど…。」トニアの視線に耐えられず、俯く。

「けど？」続きを促され、

「けど…別に今じゃなくても…。」言葉を濁す。自分で情けなくなつた。

「ね？ニイ口顔上げて？」彼女の優しい声で、

「え？」反射的に顔を上げる。呆れないのかと嬉しさが込み上げる。

「『いつか』なんて待ってちゃ駄目なの。変えたいなら変わろう？」

トニアが両手で俺の頬を包む。

「…っ。」「声にならず、コクコクツと頷くしかできなかった。

「ふふっ。じゃあ…行こう！」そう笑顔で言い、俺の手を引いた彼女の手は少し震えていた。

「トニア…トニアも、その…不安…なの？」少し躊躇し、問う。

「…！バシた？でもね、大丈夫。だって、ニイロがいてくれるから。

「臆面もなく言うトニア。

「俺何も出来ないけど…トニアは守るよ、約束する。」トニアの言葉を聞いていたら、恥ずかしさなんてどこかにいつてしまった。華

奢な肩を抱く。

「うん。私もニイロを守るよ、絶対。」トニアも丁寧に言葉を紡いだ。

ただ願う。

キミの隣をずっと歩けますように…。

く素直になれないく

『神は自ら助くる人間を助く』という言葉聞いたことがある。神は全能ではないのか、何故選ばれた人間だけなのか、選ばれなかった人間はどうすればいいのか、漠然とそんなことを思った。

微睡みの中で、幾度となく母を探す。ゆらゆらとした心地はまるで水面に漂っている様だが、心地よいと感じたことは1度としてない。代わりに言い知れぬ焦燥をいつも感じている。

「母さん、どこ？」呼びかけるが、返事はない。

「母さん、返事をしてよ。お願い…だから。」声が掠れる。

前方に光を纏った母・トニアの姿が現れる。

「母さん！いや、アル？」母さんには会ったことはないし、アルとも短い付き合のだが、なんとなく雰囲気で解る様になっていた。

『マーニ、悪かったな。』アルが今まで見たことないくらい真剣な表情かおで言う。

「え？」何のことだかさっぱりわからなかった。世話になったこと？、母の身体に入ったこと？、…それとも…生んだこと…？途端に怖くなり、息が上がる。

「あ、アル！」なんとか声を絞り出したところで目が醒めた。

「ア…ル…？」アルがいない。普段は隣でだらしない格好で寝ているのに。まさか…。

部屋のドアを乱暴に開ける。

「アル！」

「マーニ、早いな。」台所でコーヒを淹れていたアルが振り向く。…なんているんだよ。「ボソツと呟いた。本当はアルがいたこと

に、安堵しているが、照れ臭くてとても言えない。

「あん？ていうか、今オレを呼んでたんじゃねえのかよ。」アルが眉間に皺を寄せる。

「そ…それは、お前がいろいろ言うからっ…お前がいなくなると思っ
て！」勢いで言ってしまった。

「…何、何？心配してくれたってことお？」なんだか嬉しそうに、
アルが茶化す。

「ちがっ…違う！お前の心配じゃなく、母さんの身体を心配して…
！？」嘘はついてない。だが、それだけではない。アルの存在が自
分の中で大きくなっていたことに気づき、驚く。

「普通に考えればそうだよな。」苦笑するアル。

「…っ。」なんだか胸が痛む。

「無駄話は終りだ。ここからシリアスな。」コーヒーをテーブルに
置き、ぱんぱんっと手を叩く。

「『シリアスな』って言われて、なれるかよ…。」イスに座りなが
ら、じろっとならむ。

「いいから、聞けっつて。初対面の時俺がこの身体トリアから出たら身体は
腐るっつて言っつたろ？」アルは真顔で続ける。

「ああ…。それが？」今考えても変な出会いだ。

「あれは、嘘だ。というか、オレがこの身体から出ること自体もっ
…出来ない。」静かにだが、はつきりと言うアル。

「おま…っ！またそんな大事なことを！」思わずガタンツと立ち上
がる。

「オレが憎いか？…ま、当然だな。」自嘲の笑みを浮かべるアル。

「…っ！」

（違う、憎いんじゃない。）
否定したいのに、他にも言いたいことはあるのに、全く言葉が出な
い。

「隠さなくていい。…これをやる。」言い返さないことを肯定と理

解したのか、アルがコトンとテーブルに置いたのは金の銃だった。

「これは…？」手に持つと重さがずっしりと伝わってくる。

「…その銃は、ニイロが使っていた特別製でな。悪魔でも殺すことができる。確か…アポロンといったかな。」相変わらず表情を変えないアル。

「……。」なんとなくアルが言いたいことがわかったが、無言で続きを促す。

「殺せ。」アルが俺の手にアポロンを構えさせ、自ら銃口を眉間に当てた。それは祈る姿にも似ていた。

「っざけんな！勝手に契約したのは、そっちだろ！それに、文句も感謝も何も言わせないつもりかよ、自分だけ逃げんな！」付き合いは短いし、まだまだ知らない部分もきつとたくさんある。でも…。

(でも…確かに楽しかったんだ。)

「それに…これは父さんが殺す為じゃなく守る為にくれたんじゃねえのかよ！そんなものを殺しの俺は使いたくない！」アルを殺したくないとはさすがに言えなかったが、本心だった。

↳ i n s e n s i b i l i t y (前書き)

チロル大好きなので…原作には及びませんが、書かせていただきま
した。

「お前：頭いいなあ！」感心した様にアルが言う。

「はあ？」マイペースすぎて理解できない。

「でさ、結局父さんは何をしてて、どこへ行ったんだ？」

朝起きたらニイロはいなかった。対悪魔の銃といい、今まで放浪していたのは、何か理由があるからなのではないか。

「んーまあ、どこにいるかは…流石にオレでもわかんらないな。でも…。」難しい顔でアルが腕を組む。

「でも？」

「ニイロの情報が集めやすそうな場所ならわかる。」自信満々に言うアル。

「本当だろうな？」悪い奴ではないがいまいち信用できない。

「あれっ？信用ない？」暢気に笑うアル。

夜が更け、ふたりはニイロがよく通ったという酒場に向かった。

埃と煙草の煙と酒の匂いの混ざった空気、がたいの良い男たちのダミ声、露出度の高い服を着た女たちのわざとらしい甘えた声。

思わず顔をしかめると、

「おーおーお子ちゃまには少し刺激が強かったか？」とアルにからかわれた。

「…っ！」何か言い返したかったが、赤面し睨み返すことしかできなかった。

酒場は騒がしいが、

「なあ今晚だけでいいからさあ。」

「退屈させないぜえ。」と言う男たちが誘う声と、

「いい加減にしてよ！」と言う女の口論が聞こえてきた。

「ああいうバカはどこにでもいるんだな。」溜め息をつきながら、先ほど街で女に間違われて口説かれたことを思いだし、腹が立つ。

「まあマー二を女と間違っあたり、よっぼど飢えてるか、そういう趣味だったってとこかね。」アルが可笑しげに言うが、無視をした。「どけ。」1人の男を背後から蹴り倒す。

「…え？…ニイ…口？」絡まれてた女が嬉しそうに顔を上げ、すぐ困惑した表情になる。

「ニイ口って…あのニイ口か！？」伸びている仲間をほったらかしのままもう1人の男が逃げる。

「およ？チロルじゃーん！おっひさあ！」ひよっこりと、人混みから顔を覗かせたアルが女に近づき、肩を組む。子供が玩具を見つけた時の様な顔をしている。

「あっ…アンタ！あの時私とニイ口の邪魔した女！なんでまた…っというか、離しなさいよ！」アルの腕を払うチロル。

「ん？3人でやる決心がついたんだろ？」ニヤニヤと笑うアル。

「ちっがうわよっ！…っというか、この子は誰？ニイ口に声とか雰囲気そっくりだけど。」品定めする様にずっと顔を近づけてくるチロル。緑の目がキラキラと光っている。

「…え…っど。」目のやり場とどう説明したらいいのかが、わからず焦る。

「こいつか？こいつはニイ口の、む…。」アルに手を引っ張られ、ちよっど頬擦りをしたかたちになった。

「わー！お、おとうと！弟のマー二です。はじめまして、よろしく！」わたわたと口走り、アルの口を押さえる。息子ということとはなんとなく隠していた方が雰囲気的に良いと思った。

「ふーん。で？どうしたの、こんなところで。」アルをあくまで視界に入れないつもりらしく、マー二の方に身体を向ける。

「あ、の…ち…兄が…どんなことをしているか…知りたくて。」ニイ口と親しかった(らしい)チロルに聞けば何か知ってるかもしれない。

「その話は…、ここじゃちょっとね…私んち来る？すぐそこだから。」
「スツと細く長い指が酒場の外を指す。」

「いいんですか！？」まさかこんなすぐに手がかりが見つかるとは思わなかった。

「おい。気をつけるマーニ、誘われてるぞ。まっお前顔のわりにモテなさそうだし、鈍感だし…いい機会なんじゃん？」わざとらしくアルが声を潜める。

「なんの話だよ？」確か父の話をしていたはずなのだが…違ったのだろうか。

「素材はいいし…若いし、イロイロ教えがいがありそう…ってなんでよ！私はニイロー筋なんだから！」バンツとテーブルを叩き、アルを睨むチロル。

「ふひゅ〜 ノリツツコミとは案外イケる口でないの、お嬢さん？」
明らかにチロルで遊んでいるアルだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3219o/>

死者の忘れ形見

2011年6月9日00時06分発行